歌に触れる

遊 縁 の 衆（人生を数倍楽しむ会）

◎平成二十五年一月十九日（第十六回）

（佐藤　紀之）

叱られるその前に「恥ずかしい」心のブレーキ強く踏み込め

北風よ我が正面より吹きつけよ僕にとっては上昇気流

新しき庵の庭にゆらと立つ南天まとふ白妙の朝

生き咲き燃ゆ私の中に一筋の命があるを元旦に問う

（佐藤　亮照）

書き初めに「忘己利他」をしたためて自問自答の今日が始まる

はるばると孫ら来たりて帰りけり淋しさともに腰さするわれ

新しき年を迎えて想うこと他人(ひと)のよろこびわれの礎(いしずえ)

正月を終えてようやく座につきて年賀状の文面を読む

（松田　昌泰）

生あれば触れることなき姉の頬その冷たさは今も手にあり

正月の喧騒去って我が家には静寂だけが佇み居り

（黒沼　貞志）

西の陽の光纏(まと)いて晩(おそ)紅葉湖面に映えて色まさるらん

朽ちてなお枯れ野のなかの大木よ凛と立ち居り白さ際立つ

朝陽さす木漏れ日の中歩み行く落ちし枯葉の山路やさしき

冬もみじ寂光に映え増す枯色そのかたくなさいと愛(いと)おしき

吹き渡る風に誘われ押すシャッターわれを誘いし冬の足音

格好のフレーミングの設定を終えてひたすらゴンドラを待つ

借景に色付く木々を配置して二人の思い出蔵王の黄昏

立冬の薄墨色の宮の庭銀杏(いちょう)の落葉妖しくも見ゆ

冬浅し先人詠みし雪迎え小さき庭に眼を凝らすわれ

風に乗り庭に届きし冬もみじおしろい粧(よそ)う初霜の朝

雨音に目覚めし朝は寒九の日伝え聞きし豊穣を期す

（千葉　克明）

初春の竹駒の宮いや高く新しき年迎えるぞかし

人生の半ばを過ぎし我が息子「歳月人を待たず」知るらん

国々の無益な争い果てしなく賢者居ぬまま時は過ぎゆく

（長谷川美喜夫）

都会から田舎についたその瞬間ねこはこたつでブルブル震え

寒い日はふとん出れずにストーブをつけて見つめる朝の温度計